

## ◆テーマ◆ちょっと個性的なお母さんの本

### ●さよなら、田中さん 鈴木 るりか 著 小学館

物語の主人公語り手は、田中花実、小6。生まれたときからお父さんを知らず、工事現場で肉体労働をするお母さんと二人暮らしをしています。経済的に恵まれているとは言えない生活ですが、超が付くほどたくましいお母さんと花ちゃんは、いつも前向き。

貧しくて、神社の境内で拾った銀杏を主食にして暮らしていた、という花ちゃん一家の七五三の思い出が語られる「銀杏拾い」、まだ行ったことのないあこがれの遊園地への思いを描く「Dランドは遠い」など5編の短編で構成。語り手の花ちゃんが繰り出す、冷静で的確な毒舌コメントに、吹き出したり、涙したり…。

著者の鈴木るりかさんは、2003年生まれ。小学生の時、3年連続で小学館主催「12歳の文学賞」大賞を受賞。この本は彼女が中学生の時に出版されたものです。

### ●卵の緒 (新潮文庫) 瀬尾まいこ著 新潮社

『卵の殻』でも『へその緒』でもなくて『卵の緒』です。不思議なタイトルですね。

「僕は捨て子だ。」と、自らの捨て子疑惑に悶々としていた小学生の育生くん、ある日お母さんに「へその緒見せて」と迫ります。

「これでいいかしら」とお母さんが持ってきたのは、この間食べたお饅頭の箱で、中から出てきたのは白い卵のかけら。そして「育生は卵で産んだの。」と、けろりと言ったりするのです。

このお母さんのとぼけ具合が絶妙。さて、育生くんの「卵で誕生疑惑」、はたしてどのような展開に？

### ●ハーフ 草野たき著 ポプラ社

この物語は、主人公・真治君のこんなつぶやきで始まります。——ぼくの母親の名前は、ヨウコという。ぼくは小さいときから、ヨウコが母親だと教えられてきた。ヨウコは、茶色い毛並のきれいな、犬だった。——

なにゆえお母さんが犬なのか？ そこには深い訳があるわけですが、ともあれ親子三人(?) 仲良く暮らす毎日でした。

ところがある日、そのお母さん犬のヨウコがいなくなってしまう、真治君とお父さんの必死のヨウコ探しが始まります。

この父と子は、大事なヨウコを、そして自分たちが本当に求めるものを、探し出すことができるのでしょうか…。

